

「松下アジアスカラシップ」詳細

助成番号	研究テーマ(留学目的)		
	留学国	留学機関	留学期間
	氏名	所属	区分
99-007	アーンドラ=プラデーシュ州の政権党、テルグ・デーサム党とカースト — 村落とマンダルの視点から —		
	インド	ハイデラバード大学	2000.9 ~
	浅田隆裕	総合研究大学院大学	院生博士

研究テーマ(留学目的)の説明 (助成決定時のテーマ。文責は本人)

現代のインドでは、各州に基盤を置く地方政党が台頭している。南インドに位置するアーンドラ=プラデーシュ州では、この州の地方政党であるテルグ・デーサム党が1983年から州政権を担っている。また、昨年行われた連邦下院選挙では、この党から12名が選出されている。テルグ・デーサム党が、カーストとの関連でいかに州政権を維持しているのかを明らかにすることを上記テーマの目的とする。この目的のために次の2点に焦点を当てる。

アーンドラ=プラデーシュ州において最大の政治勢力を持つカーストは土地所有カーストのレッディである。このカーストに属する者が、土地支配に基づいて村落支配を行ってきた。この村落支配者は、村落の他の人々とパトロンとクライアントの関係を結ぶことによって、村落内での影響を大きくしている。村落間の政治も、レッディに属する村落支配者や地域の有力者により行われていた。こうした村落支配者や地域の有力者の中でも進取の気に富む者は、より広範な地域で有力である人物と結びつき、県あるいは州レベルで権力を握ることのできる派閥を形成してきた。テルグ・デーサム党が台頭する以前は、国民会議派が独立以降政権を担ってきた。その政権基盤はこうしたレッディの派閥提携に基づいていたと考えられる。テルグ・デーサム党の政権基盤においてもレッディの派閥構造があると推測される。この派閥構造がいかに形成されているかを明らかにすることを第1の焦点とする。

1970年代後半から後進諸階級など低カーストが力をつけてきたと考えられる。その要因として、政府系の貸付金が農村部に浸透してきたことや土地改革の実施を挙げることができよう。また、村落が世界経済と結びついたことも挙げることができよう。テルグ・デーサム党がその権力構造の中にこれら低カーストをいかに組み入れているのか、この過程を明らかにすることを第2の焦点とする。

インドの政治学者のラジニ・コタリは、カーストは政治にとってエスニック変数となり、このエスニックな個別主義的アイデンティティーの表出がインドの政治統合にとって必要であると延べている。低カーストがテルグ・デーサム党の権力構造に組み入れられる過程を明らかにすることは、このラジニ・コタリの言葉を検証することにもつながる。

氏名：浅田隆裕

所属：総合研究大学院大学 文化科学研究科

留学先国：インド

留学先機関：ハイデラバード大学

留学期間：2000年9月～2003年8月

【研究テーマ】

アーンドラ＝プラデーシュ州の政権党テルグ・デーサム党とカースト

【成果報告】

本成果報告書では、まずハイデラバード大学留学中に行った調査・研究の進捗過程について述べる。次に、調査・研究から得た知見に基づき、研究テーマ「パンチャーヤット・ラージ制と農村開発——村落社会構造の考察から——」について簡単に説明することとしたい。

I. 調査・研究の進捗過程

2000年10月から2003年8月にかけて、ハイデラバード大学社会科学部地域研究所に留学し、M. L. K. ムルティー教授の指導を受けて調査・研究を行った。その進捗過程は以下の通りである。

(1) テルグ語習得：2000年11月から2001年4月にかけて、ハイデラバード大学テルグ語学科教授の指導を受けて、読み書き話すというテルグ語の基礎知識を習得。

(2) 文献収集・研究：2000年10月から2002年2月にかけて、フィールド選定に関わる文献、パンチャーヤット・ラージ制の展開を把握するためにアーンドラ＝プラデーシュ州に設置された委員会報告書、同州で実施されている農村開発計画を把握するために同州政府が発行した第8期5カ年計画を収集・通読・検討した。

(3) 資料収集：2002年8月と9月にランガ・レッディ県庁にて、農村開発に関わる資料を収集。

(4) フィールドワーク：2002年4月から6月にかけて、ランガ・レッディ県ドマ区の3村において予備調査を行う。その後、2003年1月から7月にかけて同県同区のキシタプール村において本調査を行った。

II. パンチャーヤット・ラージ制

この節では、アーンドラ＝プラデーシュ州におけるパンチャーヤット・ラージ制の構造、次にこの制度の展開を跡づけた後、1993年の憲法改正により地方自治制度となった点を指摘する。

アーンドラ＝プラデーシュ州では、パンチャーヤット・ラージ制は3層構造をとっている。村落レベルには、グラム・パンチャーヤット(gram panchayat)が設置されている。村落と県の間には、マンダル(mandal)という行政区分が置かれている。マンダルは、20から30の村落から構成されている。そして、このマンダルには、マンダラ・プラジャ・パリシャド(mandal praja parishad)が設置されている。県レベルには、ジラ・プラジャ・パリシャド(zilla praja parishad)が設置されている。そして、それぞれのレベルのパンチャーヤットには、成員と議長が置かれている。グラム・パンチャーヤットの成員と議長は、村人からの直接選挙により選ばれる。調査村では、成員は9名、議長は1名であった。マンダル・パリシャドの成員は、グラム・パンチャーヤットの議長とその他の成員から構成されている。その他の成員は、数村から構成され

るM. P. T. C. (mandal parishad territorial constituency)から村人により直接に選ばれる。そして、このその他の成員のみがマンダル・パリシャドの議長を選ぶことができる。調査村が属すドマ・マンダルでは、グラム・パンチャーヤットの議長は21名、その他の成員は10名であった。ジラ・パリシャドの成員は、数村から構成されるZ. P. T. C. (zilla parishad territorial constituency)から住民により直接に選ばれる。そして、この成員がジラ・パリシャドの議長を選ぶ。ドマ・マンダルからは、1名がジラ・パリシャドの成員である。

パンチャーヤット・ラージ制は、1957年に中央に任命されたバルワントライ・メータ (Balwantri Mehta) 委員会の提言に基づき、インド全州に設置された。アーンドラ＝プラデーシュ州には、1959年に3層構造の同制度が設置された。この制度の設置目的は、農業、灌漑、教育、保健衛生、雇用、住宅供給に関わる開発事業を農村部の住民の参加を通して円滑に実施しようというものであった。ところが、住民参加を確実なものとしてパンチャーヤット・ラージ制は機能しなかった。そこで、1977年にはアソカ・メータ (Asoka Mehta) 委員会が中央に任命され住民参加を促すようなパンチャーヤット・ラージ制の組織を提案した。アーンドラ＝プラデーシュ州においても、アソカ・メータ委員会の勧告を検討するためにC. ナラシムハン (Narashimhan) が議長を務める委員会が設置された。

1980年代を通じての、パンチャーヤット・ラージ制議論の中心は、この制度に対する憲法上の支持の必要性であった。そして、1991年9月1日に憲法改正法案が提出され、1992年12月22日に下院で可決され、翌23日に上院で可決された。そして、1993年4月24日に第73次憲法改正法として施行された。この憲法改正において重要な点は、パンチャーヤット・ラージ制が住民参加を前提とする地方自治制度として規定されたことである。

Ⅲ. 農村開発

アーンドラ＝プラデーシュ州では、地域政党であるテルグ・デーサム党が1982年以降、州政権を担当してきた。現在は、同党のN. チャンドラバブ・ナイドゥー (Chandrababu Naidu) が州首相である。この首相の下、住民参加を促す農村開発計画が導入されてきた。この節では、調査村で見出すことができた農村開発計画について説明することとしたい。これらは、1994年以降に導入された開発計画である。

① ジャンマブーミ・プログラム (Janmabhoomi Programme)

ジャンマブーミとは、テルグ語で「母なる大地」という意味である。このプログラムのキャンペーンは、年に2度、1月と6月あるいは7月に10日間、マンダル・レベルの政府役人が各村を訪問する形式で催される。昨年6月に行われたキャンペーンでは「女性と農民の擁護」が、今年7月に行われたキャンペーンでは「農民の擁護」が、謳い文句として掲げられていた。調査村では村人の参加率は高かった。しかしながら、村人の参加が少ない村も見受けられた。

キャンペーン期間中、住民が必要であると考えるものを用紙に記入し、それをグラム・パンチャーヤットの職員に提出することができる。公営バスが村へ乗り入れることの要求、個人の家屋に便所を設置することの要求などを具体例として挙げるることができる。

② フッド・フォー・ワーク (Food for Work)

このプログラムの目的として、村の開発と貧困者の救済を挙げることができる。村の開発として、新しい道路の敷設、道路のセメント舗装、排水路の設置等を挙げることができる。これら開発事業工事を行うのは、村の貧困者である。彼らは、日給をお米という現物により支給される。また、どの道路にセメント舗装を施すかという問題は、グラム・パンチャーヤットにて決定される。調査村においては、過去4度この開発事業が行われた。それらは、2件の道路への割栗敷設、排水溝設置、道路のセメント舗装である。

③ セルフ・ヘルプ・グループ(Self Help Group)

村の女性が15~20名程度で、このグループに組織化される。また、ほとんどの女性が、貧困層に属している。このグループの目的として、それぞれのメンバーが小額の金額を貯蓄することを通して節約習慣を身につけることを挙げることができる。また、このグループは、県農村開発機関(District Rural Development Agency)から貸付金を低利子で借りることができる。その目的は、この資金により付加的収入を創出し、それによって貧困縮減を目指すことである。調査村では、10のグループが存在しており、165名の女性が参加している。

④ ヴァナ・サムラクシャナ・サミティ(Vana Samrakshana Samithi)

森林を保護し協同利用するための委員会。日々の生活を森林に依存している住民は、この委員会の会員になることができる。調査村では248名がこの委員会を構成しているが、事実上、この委員会は機能していない。

⑤ ジラ・アクシャラシャタ・サミティ(Zilla Aksharasyatha Samithi)

読み書きを教える成人教育。調査村では、セルフ・ヘルプ・グループ、ドウワクラ・グループ(DWCRA group)[セルフ・ヘルプ・グループに類似した団体]に参加している女性に対して識字教育が施された。

これらが以外にも重要な農村開発事業はあるが、調査村で実施されている主要なものは以上である。今後は、テルグ・デーサム党のこれら農村事業計画の政策立案過程について考察していきたい。

IV. フィールドの村落社会構造

アーンドラ=プラデーシュ州ランガ・レッディ県キシュタプール村において2003年1月から7月までフィールドワークを行った。この節では、この村に存在する2世帯のドラ(dora)について述べることにしたい。ドラという言葉は、村人は大王という意味で使っている。

この村は、旧ハイダラバード藩王国の一部を形成していた。ニザーム(Nizam)と呼ばれるムスリムの藩王が、この藩王国を1724年からインドの独立まで治めていた。この藩王国の行政機構の末端、すなわち村に3役が存在していた。それらは、パトワリ(patwari)[土地台帳の保持]、マリ・パテル(mali patel)[土地歳入徴収援助]、ポリス・パテル(police patel)[村落の秩序維持]である。この藩王国の統治の末期、ムスリムのある1世帯がパトワリの職につき、現在の2人の祖父がマリ・パテルとポリス・パテルの職を兼ねていた。

この村で調査により明らかになったカーストを、その伝統的職業とともに階層順に述べることとしたい。上・中位カーストとしてレッディ(reddi)[農民]、バリジャ(balija)[農民]、カーブ(kapu)[農民]、ゴラ(golla)[羊飼]、クンマリ(kumhari)[陶工]、ムタラシ(mutarassi)[農民、労働者]、ガオンドラ(gaondla)[ヤシ樹液採取者]、アウスラ(ausla)[金細工師]、ワドラ(wadla)[大工]、カンマリ(kamhari)[鍛冶屋]。上位ムスリムにはカティカワル(katikawallu)[屠殺者、家畜仲買人]。下位カーストとしてマンガリ(mangali)[散髪屋]、チャッカーリ(chakali)[洗濯屋]。半部族カースト・下位ムスリムにはイエルカラ(yerukala)[籠製作者]、ファキール(fakir)[物乞]。不可触民には、マラ(mala)[掃除人]、マディガ(madiga)[鼓手、皮職人、掃除人]。また、この村には、カティカワル、ファキールに属さない多数のムスリムが居住している。彼らは上・中位カーストに分類されるが、その階層的位階については明言できない。この位階は、儀礼的位階、経済的政治的力を要因として形成されている。ドラの

2 世帯だけが、最上位のレッディに属している。次に、ドラの経済的力として、その土地所有状況について述べることにしたい。

ドラの2 世帯が、それぞれが41 エーカーと21 エーカーを所有している。上述したパトワリの子孫が現在3 世帯に分かれており、その中の1 世帯が26 エーカーを保持している。これら世帯が、調査村の大規模土地所有者であると言える。調査村の農業は、カリフ期（6月～9 月）、ラビ期（10 月～4 月）に分けることができる。カリフ期には、小規模土地所有者と非土地所有者は、大規模土地所有者の下で農業労働者として労働を行うことになる。しかしながら、調査村は乾燥地帯に属しておりラビ期には農業はほとんど行われぬ。したがって、この農期には、小規模土地所有者と非土地所有者はハイダラバードあるいはムンバイへと肉体労働に赴かなければならない。ドラは、大規模な土地を所有しているということで村落においてある一定の影響力を保持していると言える。しかしながら、交通の発達によりこの村落はハイダラバードやムンバイ等の都市と結ばれ、多くの村人が肉体労働者としてこれら都市で働き、村の家族に仕送りを送っている。こうした環境の中で、ドラは、どのように村の中で権力を保持しているであろうか。この点は、今後の課題としたいが、農業以外の事業に進出し村人を雇用することをその1 例として考えることができよう。

2 人のドラは、それぞれ国民会議派とテルグ・デーサム党を支持している。アーンドラ＝プラデーシュ州での現政権党がテルグ・デーサム党であるので、この村落でもこの政党が優勢である。また、村のおよそ10 名程度の村落リーダーは、カーストではカープ、バリジャ、ゴラ、クマリ、ムッタラシという上・中位のカーストに属している。そして、これら村落リーダーのほとんどが、テルグ・デーサム党を支持している。彼らの特徴は、30 代に属しており、テルグ・デーサム党が村人から支持を得るために活発に活動している点である。その具体例として、お米や灯油の配給券を得ることができるようマンダル・レベルの政府役人に推薦することを挙げることができる。それに対して、国民会議派支持の村落リーダーは、この党を支持しているドラ同様に、熱心に農業活動に従事し、あまり政治活動を行っていないことを特徴として挙げることができる。ドラが村の中で権力を保持するには、政権を担っている政党と結びつくことが重要であることを指摘することができる。

V. パンチャーヤット・ラージ制・農村開発と村落社会構造

第Ⅱ節で、第73 次憲法改正によりパンチャーヤット・ラージ制が住民参加を前提とする地方自治制度と規定されたことに言及した。第Ⅲ節で、アーンドラ＝プラデーシュ州では、

N. チャンドラバブ・ナイドゥー州首相のもと、住民参加を促す農村開発計画が数多く導入されたことを指摘した。第Ⅳ節で、ドラが村落内で大きな権力を有していることを指摘した。本節では、調査村において目撃したある出来事を紹介して、ドラの持つ権力がパンチャーヤット・ラージ制あるいは農村開発計画の健全な機能や実施の障害となることを指摘する。

第Ⅲ節でフッド・フォー・ワークについての説明を行った。この開発事業計画と同じように S. G. R. Y. (Sampoorna Grameen Rozgar Yojana) という開発計画では、村の貧困者が開発事業工場の代わりにお米という現物の支給を受ける。この S. G. R. Y. の下、調査村では家畜用の貯水場を新たに設けることとなった。今年2 月26 日に村落行政官 (Village Secretary) は、グラム・パンチャーヤットにおいて S. G. R. Y. から支援を受けて家畜用の貯水場を設けることを、グラム・パンチャーヤットの成員と議長に伝えた。しかし、その集会の場で、どこにその貯水場を

設けるのか決定することはできなかった。翌日、村のリーダー達がドラの家で集会を開き、その場所を決定した。集会を開いた村のリーダー達もドラも、テルグ・デーサム党を支持する側であった。農村開発事業の実施には、制度上のパンチャーヤット・ラージ制だけではなく、ドラによる意思決定が必要となる。農村開発事業の実施には、新しい制度と既存の社会制度という2重構造をもって可能となる。

住民参加を目標として新たなパンチャーヤット・ラージ制と農村開発事業が村落に導入されている。しかしながら、村落社会がもつ社会制度や秩序に沿う形でのみしか、それらは実行されないのである。

今後の課題として、アーンドラ＝プラデーシュ州政府のウェブサイトによる各農村開発事業の実施状況の確認、他州の農村開発事業の実施状況を文献・雑誌記事から確認することを挙げることができる。



クンマリ（壺づくりカースト）が壺を製作しているところ



村の寺院の改築祝いで、女性達のご飯の入った壺を頭に寺院の周囲を回っているところ

【留学全般についての感想】

今回のインド滞在では、人間関係の濃密さに感銘を受けた。そのように感じた理由を少し書いてみたい。

ハイダラバード市内での生活は快適なものではない。それは、交通事情のためである。まず、バス、自家用車、バイクのすさまじい交通量である。このため、排気ガスに規制がなされてい

ないので、市内の空気は非常に悪い。また道路には信号がほとんどないので、横断するのが難しい。老婆が若者の手を握って道路を横断しようとする姿をよく目撃した。このためハイダラバード大学のキャンパス内に、最初の1年間は滞在していた。同大学は、市内から20km離れた文教地区に位置し、環境が非常に良かったからである。

しかしながら、留学して1年後、インドの人々の日常生活に対する好奇心を抑えることができずに、キャンパスを離れて市内にアパートを借りて住み始めた。そこでは、他に4家族が生活を営まれていた。ハイダラバードの夏は4月、5月である。気温は40度を越える。滞在していたアパートでは、日常用・飲料用の水を地下から汲み上げていた。夏の間は、地下水の量が減少する。そこで、水を節水しながら生活するわけである。このように苦労を共にしながら生活を営むので、ある種の連帯感が生まれ、相互扶助の精神が芽生え、アパートの住人みんなが家族のように思えたりするようになった。彼らも私にそのように接してくれた。

その後、フィールドワークの本調査のため、ハイダラバードから100km離れた村に住み込んだ。家主とその家族には、ゲストとしてもてなしてもらった。毎日欠かさず、朝と夕方にお湯を用意してもらい、体を洗うことができた。また、祝日には、その祝日用の食べ物を用意してもらい、なぜその日が休みなのかを体感することができた。腹痛を引き起こした時には、ムスリムの呪術師を呼んで、小さな儀礼を開いてもらった。次第に、私は家主の家族の1員となっていた。また他の村人には当初警戒されていたが、次第に村の1員として受入れてもらった。フィールドワークを行う前には、ある程度の過酷さを予想していたが、全般的に快適に村での生活を送ることができた。

これからの論文執筆にとって、インドの人々との以上のような触れ合いの経験が欠かすことができないものであると考えている。調査・研究だけではなくインドでの生活全般を松下国際財団に支援して頂きました。ありがとうございました。